

アトリエ 琉游舎 だより 36号

2018年9月26日発行

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

コリーナシップ

- 英語にshipという接尾語があります。例えばfriendshipは友情という意味です。fellowshipは共同体、membershipは会員、partnershipは共同・協力、relationshipは関係・結びつきなど、状態や性質、資格、関係、集団、地位などを表す接尾語です。
- そしてshipという単語は船のことです。
- 「コリーナシップ」はコリーナという大きな船に住んでいる人達の、関係、結びつき協働などを全てひっくるめた言葉。コリーナに住む人、そしてそこに関係する人から周辺の市町村まで広がる、みんなが、豊かで、楽しく、安心な毎日を送るための母船です。
- 琉游舎は「コリーナシップ」に全面的に協力して参ります。
- 活動の状況はアトリエ琉游舎ホームページ ryuyusha.com でもお知らせいたしますが、コリーナシップのホームページも新たに開設する予定です。

コリーナシップは10月1日出港です！

| 10月のスケジュール | | | 木 | 金 | 土 | 日 |
|------------|-------------------|----|--------------------------|----|---------------------|------------------|
| 月 | 火 | 水 | 27 | 28 | 29 | 30 |
| 10月1日 | 2 写経会 13時半 | 3 | 4 映画会 13:30 | 5 | 6 | 7 写経会 13時半 |
| 8 | 9 読書会 13:30 | 10 | 11 映画会 13:30 | 12 | 13 詩話会 13時半から | 14 |
| 15 | 16 | 17 | 18 映画会 13:30 | 19 | 20 | 21 |
| 22 | 23 読書会お休み | 24 | 25 映画会お休み 居酒屋の会お休み | 26 | 27 | 28 |
| 29 | 30 | 31 | 11月1日 映画会 13:30 | 2 | 3 | 4 写経会 13時半 |

写経会
10月2日(火)
10月7日(日)
13時半から

読書会
10月9日(火)
13時半から

詩話会
10月13日(土)
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

林道行き止まりの駐車場に車を置いて登山道に入り、雑木林の間を熊笹をかき分けながら一步一步足を運んでいると、急に視界が開け眼下に先ほどの駐車場が見えてきました。豆粒のように私の運転してきた車が見えます。地図の等高線で確かめると400メートルほどの高さを小一時間かけて登ってきたようです。1時間足らずでも足を前に運び続ければ、こんな高いところまでいけるのだなと、人の足の大変な能力にあらためて驚かされるとともに、せっかく登ってきたのに、またあの場所に戻らなければならないのかと思うと、下りは頂上からハングライダーで直接登り口まで降りられたらいいのにと、有りもしないことを考えてしまいます。山歩きは全く不合理で非生産的な行為です。時間と体力をかけて頂上に行き写真を撮っておにぎりを食べて、また時間と体力をかけて振り出しに戻る。なぜ毎回毎回振り出しに戻る行為を飽きもせず繰り返しているのか、私には私の行動が不可思議でなりません。

「胃のほかは誰の支配もうけずに暮らしている」^{注1}という慢心の極みのような小説の一節に先日出会いました。権力にも常識にも社会にも、自分以外の誰にも支配をうけず自分は生きていると言うことを力強く主張している言葉です。主人公たちは戦後のどさくさの中で公共の財産を盗み取る犯罪集団です。しかしながら行為の善悪や倫理的な視点でこの一節を判断してはいけません。反社会的な行為を題材にとりながらこの小説が魅力的で読む者の心を揺さぶってくる理由は、全ページを通して人間本来の生きる自由と原始的なエネルギーを作者が全身で書き綴っているという点にあると私には思えるのです。主人公たちの行動は無茶苦茶で、他人からみれば理解不能、本人たちも合理的な説明が出来ないでしょう。なぜならば「誰の支配もうけずに暮らしている」からです。ただ残念ながら「胃の支配」だけからは逃れられません。胃の中が空っぽでは動くことも考えることもままなりません。つまりは人間どんなに自由であると主張しても生きることからは自由になれないということなのでしょう。

お経によく出てくる言葉に「我慢、邪慢、増上慢」があります。いずれも自らを過剰に評価して自我に固執し思い上がる心のことです。我慢は「おれがおれが」という慢心、邪慢は「自分は悪くない」という無反省の慢心。増上慢は「悟ってもいないのにすべてを悟っている」と錯覚する慢心です。人の行為の始まりは大概「自分にだってできるんだ」という根拠のない慢心から出発しているのかもしれませんが、それでも精進と忍耐を怠らず続けていき、だんだん思うような結果が得られてくれば自信が芽生えてくるでしょう。そうなれば対象を過小評価することも羨むこともなく、正しく物事を判断できるようになるはずで、根拠のない慢心に精進と忍耐という根拠が与えられそれが自信となり、慢心はいつの間にか虚心に取って代わる可能性があるのです。虚心は何物にもとらわれずありのままに観る心のこと。

私たちは慢心と虚心の間を行ったり来たりしている生き物ではないでしょうか。「胃のほかに誰の支配も受けない」という言葉が大言壮語、増上慢の極みとなるか、「胃＝食べること＝生きること」と観て、生きること以外自分はだれの支配も受けないという精神の自由の宣言となるか、それはその行いに向けて虚心にたゆまぬ歩みを続けているかどうかにかかっているのです。少しでも歩みを止めれば「我慢・邪慢・増上慢」が忍び寄って来るとでしょう。この歩みを止めないために、お釈迦様は「自分の持てるものを持たざる者に与え（布施）」「行いの規範を良く守り（持戒）」「不平不満を言わず耐え忍び（忍辱）」「一生懸命怠らず」（精進）」「こころを静かに保ち（禅定）」「真実を見抜く力（智慧）」を持ちなさいと言われていました。いわゆる六波羅蜜です。安らぎのところへ向う歩みを止めればそれは慢心となり、歩み続けることができればそれは虚心でいられるのです。「よく生きるため」には「生きること」が絶対条件です。そのためには食べなければなりません。「よく生きること」はお釈迦様の私たちへの願いです。ですから「自分の胃のほかは誰の支配もうける必要はありません」ということも精神の自由と平等を願うお釈迦様の願いのほうです。慢心から始まり虚心との間を行きつ戻りつする歩みは、人間本来の生きる自由とエネルギーをお釈迦様が私達に与えてくれているから出来ることなのだとは私は考えます。

「よく生きること」といわれても、具体的にどうしてよいものか分からないものかもしれませんが、私はそれを日常の生活の結果としてついてくるものと考えたいのです。毎日の生きることの積み重ねとして「よく生きる」があると考えるのです。慢心と虚心の間の往来の中に毎日があると観ることです。そしてこの毎日はお釈迦様の願いである「自分の胃の他は誰の支配もうける必要はありません」によって与えられている毎日です。だから自分や他人の行為を合理的に説明したり理解したりは、あまり意味のあることとは思われないのです。なぜならばわたし達のこの毎日は、お釈迦様だけが思惟出来る不可思議な生きる自由とエネルギーによって与えられ動かされているものだからです。

私の繰り返し振り出しに戻る山歩きも、頂上で梅干しのおにぎりや胡瓜の塩漬けや卵焼きを食べる喜びのためだけに、不可思議なエネルギーが導いてくれたまでのことなのでしょう。

雪の降る前にあと何座でこの喜びを味わえるか楽しみです。

それではまた次号でお会いしましょう（出琉）

注1：「三文オペラ」開高健

琉游舎：戸井 出琉・恭子

お問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152

矢板市大槻2319-17 コリーナ矢板C-850

Mail:toi101izuru@outlook.jp

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/